

博物館だより

1992.9
第11号

大津市歴史博物館



舎利容器(臨潼県博物館蔵)

シルクロードの都 9月12日～10月11日

長安の秘宝展を開催

大津市歴史博物館では、平成四年九月十二日から十月十一日まで、日中国交正常化二十周年を記念して、日本中国文化交流協会、日本経済新聞社との共催で「シルクロードの都―長安の秘宝」展を開催します。本展は中国の古都・長安の芸術の精華と交流を中心として、特に漢・唐時代の一〇六點の作品により紹介します。

シルクロードは、英語で「Silk Road」、ドイツ語で「Seidenstragen」、中国語で「絲綢之路」と表示され、もっともポピュラーなオアシス路をはじめ、ステップ路(草原の道)、南海路の三ルートからなり、中国で生産される絹などを輸送していたことから命名されました。

シルクロードの都・長安は、現在中国陝西省の省都西安の古い名称で、紀元前十一世紀の西周代から秦・漢代を経て隋・唐代にいたるまで十一の王朝の都が築かれた三〇〇〇年の歴史を誇る中国最大の古都であります。とりわけユーラシア大陸を横断し西アジアやヨーロッパに通じるシルクロードによる東西の文化交流は、七世紀から八世紀にかけての唐王朝の隆盛により絶頂期を迎えます。そして長安の都には、遙か遠い西方から多くの富と文化が流入し、国際的な大都市として繁栄していました。この間、特に仏教美術においては、西方からのガンダーラ美術、ササン朝美術の素地のうえに確立されました。日本との交流も遣唐使や学問僧によって活発に行われ、奈良・平安時代の文化、芸術などあらゆる分野に多大なる影響を与えました。この時代の文化交流は今日の日中友好の基礎としても重要な役割を果たしたといえるでしょう。

本展では、シルクロードによる文化交流の中心地・長安の繁栄を、特に日本との関係の深い時代を中心に、漢の代表墓である揚家湾漢墓や唐代昭陵の陪葬墓などから出土した唐三彩、さらに西安・何家村出土の精緻な金属工芸品に、仏教美術の中から慶山寺出土の舎利容器を含め、これまでほとんど紹介されなかったものなど一〇六點の作品によって紹介します。

展示作品の概要

長安の秘宝展では、次のような展示作品を展示し、皆さんをお待ちしています。

舍利容器

銀鍍金 菩薩讚仰図椰 金 宝相華文棺

唐時代 臨潼縣慶山寺遺跡出土

一九八五年五月、臨潼縣新豐鎮で唐時代の舍利塔基壇が発掘され、「上方舍利塔記」碑、三彩獅子、金棺銀椰など七十七点の珍しい文物が出土した。上方舍利塔記碑に、「大唐開元慶山之寺」とあり寺名が明らかとなった。この寺は唐時代の開元二十五年（七三七）に創建され、開元二十九年（七四一）に塔の地下に舍利奉安の室を造り、舍利を奉安した事などが詳細に記されている。塔下は斜道、甬道、主室からなり、主室の長さ



白釉 人面鎮墓獸（昭陵博物館蔵）

二・〇七m、東西一・四七mで、北半に棺床が設けられ、また石灰岩製の舍利容器があり、内側に金銅製須弥座がおさまりその上に銀椰が置かれ、さらに内側に金棺が入り、棺内にはガラス製の舍利容器が二個安置されていた。こうした材質の異なる容器を使用した舍利奉安の形式は、日本でも滋賀県大津市の崇福寺跡出土の舍利容器に類例が認められるが、塔下に部室を設けこれを安置するまでには至っていない。

この作品のうち、金棺は屋根中央に鍍金された纏枝宝相華が、周囲には珍珠団花が飾られ、本体の両側には珍珠団花があり、正面に団花宝珠と浮き彫りした獅子が、後面には珍珠団花が認められる。銀棺は屋根頂部に五つの銀線がラセン状に飾られ、中央のラセンは白玉を花のすいとし、その上に瑪瑙がのる。椰の両側には鍍金の僧形五体が並び、正面の門には左右の扉に鍍金製の菩薩が、中央には仏足が、そして後部に摩尼宝珠がみられる。

白釉 人面鎮墓獸

唐時代

礼泉縣昭陵長樂公主墓出土

人面獸身の陶俑は、ひざまづいた形態をなし頭部に円錐形の單角をもち、耳は大きく胸の筋肉がふくらみ、前足をしっかりと直立させた女性を思わせる人面である。

加彩 騎駝臥俑

唐時代 西安東郊韓森寨出土

騎手は駝駝のこぶの間にまたがって、駝駝を立たせるためにムチを打っているようにみえ、駝駝は今、まさに立た



加彩 騎駝臥俑（西安市文物園林局蔵）

んとするようすを示している。

銀鍍金 人物文八稜杯

唐時代 西安市南郊何家村出土

八角形の杯の表面を八体の立像がそれぞれ覆い、一角には半円形の花弁をもつ覆板が着き、その外側には獸頭の把手が付いている。

このほかにも、陝西歴史博物館、西安市文物園林局、西安碑林博物館、昭陵博物館、臨潼縣博物館、陝西藍田縣文物管理委員会に所蔵されている前漢・漢・北魏・北朝・北周・隋・唐時代の作品のうち、未公開の作品を数多く展示します。



銀鍍金 人物文八稜杯
(陝西歴史博物館蔵)

なお、会期中に当館講堂において展覧会に係した講演会、講座を開催する予定をしております。

◇講演会

演題 昭陵の陪葬墓とシルクロード

講師 田辺昭三氏(京都造形芸術大学教授)

日時 平成四年九月十九日(土)

午後一時三〇分〜三時

定員 一三〇名

◇講座

演題 中国の都城遺跡

講師 吉水眞彦(当館学芸員)

日時 平成四年九月二十六日(土)

午後二時〜三時三〇分

定員 一〇〇名

講演会・講座ともに受講御希望の方は、ハガキに住所・氏名・年齢・電話番号を記入して大津市歴史博物館へお申し込み下さい。申し込み切りは、九月十日(木)です。詳しくは市歴史博物館へ。

収蔵品紹介 ⑩

大津絵 鬼の行水

江戸時代 縦五五・二×横二二・三

大津絵は、寛永年間(一六二四—一四四)頃から描かれていた大津の民画です。東海道大津宿の追分で土産物として売られていました。またの名を「追分絵」ともいいます。大津絵は仏画よりはじまるといわれるように、描かれはじめた頃の画題は仏画が中心で、庶民の日常の礼拝にも使われていたと考えられています。そのうちに仏画以外にも世俗的な画題をあつかったものや風刺の意味をこめた作品が数多く描かれるようになりまし。また、時代が下がると教訓を歌にした道歌を書き込んだ作品も登場しました。大津絵の特徴は、熟練した筆づかいによる単純化された線の表現と、原色の朱・緑・黄を多用した印象的な色彩にあります。民画の類はほかの土地でも売られていましたが、なかでも大津絵は人気があり、画題の種類も一時は百種をこえるまでになりました。江戸

時代末期には小型木版摺の大津絵も発表され好評を博していましたが、版画になると大津絵独特の風味は失われてしまいました。また、大津絵は、護符としても用いられました。例えば「藤娘」は良縁に験があり、「鷹匠」は五穀豊饒を願うのに効果があるといった具合です。



本作品の「鬼の行水」は、二本の角、二本の爪をもった赤い鬼が湯桶に片足をかけ桶に入ろうとしている図です。鬼の上に黒く描かれているのがユーモラスです。江戸時代中期のはじめ頃に描かれた作品と考えられます。料紙は、縦二七・三cmの二枚の紙を中央で縫いで縦長の画面にしています。鬼の顔から胸のあたりに汚れがあり、線や彩色が少し失われているのが残念ですが、鬼の下を向いた二本の牙や七本の髭、大きな団子鼻の輪郭など、その特徴は充分に見てとることが出来ます。「鬼の念仏」は世俗的・風刺的な画題をあつかった作品のなかでも非常にはやくから登場し、元禄年間(一六八八—一七〇四)にはすでに描かれていたといわれています。江戸時代末期に人気の高かった大津絵を集めた「十種大津絵」には入っていませんが、江戸時代を通じて好評を得ていた画題です。「うわ皮を 洗いまがきて心をば 洗わぬ人の姿とやせん」という道歌を添えたものも残っており、表面だけを取り繕って心を改めない人を風刺する意味をもった作品だったことが知られます。(山崎和宏)

「須田国太郎展」閉幕

平成四年六月三日（水）から二十八日（日）まで、本館企画展示室で京都新聞社との共催で、「光と影のリアリズム―須田国太郎展」を開催し、好評のうちに終幕を迎えました。

本展は、日本洋画壇の巨匠・須田国太郎生誕百年を記念して、初期から晩年までの油彩画八十三点のほか、日本画、水彩画十六点を含む代表作約百点を展示し、独自の画風を確立した須田芸術を紹介しようとするものでした。会期中、滋賀県内ばかりではなく県外からも須田芸術に興味を抱く多数の方々が来館され、観覧者数は、七、〇六五名にのびりました。



博物館日記抄

5月13日
7月28日

- 5月13日 坂元正典氏（木下美術館長）・愛知高女同窓生来館
- 14日 唐崎中学校二四〇人・長浜小学校一六一人 来館
- 15日 第三回館運営会議開く。比叡平小・唐崎小・近江町立中央公民館来館
- 16日 旧東海道車石調査
- 21日 日野町草花の会一六六人 来館
- 23日 土曜講座「民俗入門（春祭り）」開く。定員一三〇人はるかにこえる
- 27日 博物館収蔵品収集審査会開く。森国康夫氏（建設省近畿地建）
- 28日 藤村泉・田中勝弘・小竹森直子各氏（県立安土城考古博物館）来館
- 30日 土曜講座「民俗入門（春祭りII）」開く。第四回館運営会議「光と影のリアリズム―須田国太郎展」の開場式およびレセプションを開催。坂上守男京都新聞社社長・須田寛J.R東海社長ら一〇八人出席
- 5日 立命館大学日本史研究室九七人・小牧市岩崎中学校八八人 来館
- 6日 土曜講座「民俗入門（春祭りIII）」、保存修景計画研究会開かれる。西川幸治京都大学教授・室谷誠一県立短大教授・高橋徹朝日新聞社編集委員ら 来館
- 7日 市長選挙で山田豊三郎大津市長が当選、市政初の四選に
- 11日 京都造形芸術大学学生・八尾市水道局長ら 来館
- 13日 本年度第一回ふるさと大津歴史教室「膳所焼と記念寺」開く。定員百人の三倍の申込み

16日 第五回館運営会議開く。富山秀男氏（京都国立近代美術館長）・加藤類子・鳥賀陽梨沙の両氏（同館）・菊沢浩三・下井輝久の両氏（京都新聞社） 来館

17日 新収蔵資料「絹本着色両界曼荼羅」（南北朝時代）について新聞記者発表

20日 歴史教室「瀬田唐橋と近江国衙」九六人

24日 徳島市博物館建設準備室一行来館

28日 「須田国太郎展」閉幕、観覧者数七、〇六五名

7月1日 第六回館運営会議、館内会議開く

2日 福井県みくに龍翔館運営委員会一行来館

3日 平成四年度第一回博物館運営協議会開催

4日 歴史教室「小関越と大津別院」八六人

11日 歴史教室「葛川溪谷に文化財を訪ねて」開く。四八人

15日 第七回館運営会議。神田神社（真野）・小椋神社（仰木）美術工芸調査

16日 豊島修氏（大谷大学助教授） 来館

17日 林博通氏（県文化財保護協会）・大西真理子氏 来館

18日 建部大社美術工芸調査。葛川太鼓まわし行事調査

22日 日吉大社美術工芸調査。仏教大学通信教育学部学生来館

25日 土曜講座「土器の文様をさぐる」（講師奈良俊哉県文化財保護協会技師）

26日 石丸正運県立近代美術館長来館

27日 定期の燻蒸（三十日まで）

28日 「シルクロードの都 長安の秘宝」展にもなう中国代表団五人来津

博物館だより 第11号

発行日 平成四年九月一日

編集 大津市歴史博物館

発行所 大津市御陵町二二二

大津市歴史博物館

電話（〇七七五）二二二一〇〇代